

富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター

# Center News

Center for Educational Research and Practice  
Faculty of Human Development, University of Toyama

第41号

(2021年3月22日発行)



教育工学部門・小川亮教授最終講義の様子

センターニュース第41号 目次

|    |      |   |       |
|----|------|---|-------|
| 02 | 巻頭言  | 学部長   | 大川 信行 |
| 03 | 挨拶   | センター長   | 笹田 茂樹 |
| 04 | 報告   | 客員教授  | 安井 俊夫 |
|    |      | 客員教授  | 田中 親義 |
| 05 | 報告   | 附属学校園共同研究プロジェクト   |       |
| 06 | 学園通信 | 附属幼稚園／附属小学校／附属中学校／附属特別支援学校  |       |
| 08 | 活動報告 | 学習環境研究部門<br>教育臨床研究部門<br>教育工学研究部門<br>環境教育部門                                    |       |
| 10 | 報告   | 内地留学を経験して   |       |
| 11 | 報告   | 令和2年度教大協北陸地区教育実践研究指導部門研究協議会<br>第97回国立大学実践研究関連センター協議会<br>第98回国立大学実践研究関連センター協議会 |       |
| 12 | 業務報告 | センター日誌  |       |
|    | 編集後記 |   |       |

## 「令和の日本型学校教育」について

人間発達科学部長 大川 信行

令和3年1月26日に、中央教育審議会より「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」が答申されました。これは、新学習指導要領で示された資質・能力の育成を着実に進めるために、ICT環境を最大限活用しながら、全ての子供たちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に繋げるための提言です。主な内容をまとめますと、

- ①「個別最適な学び」が進められるよう、子供の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することが求められている。
- ②「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士で、あるいは多様な他者と協働しながら、他者を価値ある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要としている。
- ③「令和の日本型学校教育」を構築し、全ての子供たちの可能性を引き出す、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現するためには、ICTは必要不可欠である。
- ④教師の情報活用能力、データリテラシーの向上が一層重要である。
- ⑤各学校段階を通じた資質・能力の形成に関しては、幼児教育の実践の質の向上、義務教育9年間を通じた教育課程、指導体制、教師の養成等を一体的に検討、特別支援教育については連続性のある多様な学びの場の一層の充実・整備の推進などが挙げられている。
- ⑥外国人の子供たちが共生社会の一員として、今後の日本を形成する存在であることを前提に、制度設計等を行うことが必要である。

なお、ここで述べられている「個別最適な学び」と「協働的な学び」についてですが、「個別最適な学び」とは、新学習指導要領における「個に応じた指導」すなわち「指導の個別化と学習の個性化」を学習者の視点から整理した概念としています。また、「協働的な学び」は、「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないように、子供同士で、あるいは多様な他者と協働しながら進める探究的な学習であり、体験活動等を通じた学習のことを指しています。

前回の「学習指導要領改訂の再確認」でも述べましたが、急激に変化する時代の中で、学校現場の先生方は教育の「新しい」部分にしっかりと対応をしなければなりません。もちろん、私たち教員養成を行っている学部・大学院も積極的にそれらに呼応できる体制と教育内容の充実が求められています。実践センターはその役割として、大学と学校現場を結ぶ機能がありますから、新しい時代の学校教育を念頭に置きながら、現場の課題解決に向けて充実した活動を行ってほしいと期待しています。

## コロナ禍のなかで

---

人間発達科学研究実践総合センター長 笹田 茂樹

2019年末からはじまった新型コロナウイルスの流行によって、世界は大混乱に陥りました。

日本でも2020年初めから様々な影響が出はじめ、東京オリンピックの延期、緊急事態宣言の発令などとともに、教育面では2019年度末に全国一斉休校の措置が取られ、国民生活のすべてにわたって大きな弊害がもたらされています。

ここ数十年経験したことのないパンデミックに、「何が正しいのか？」正解がわからないまま、各国政府が試行錯誤を繰り返しながら対策を模索しているのが、世界の現状だと考えます。

日本における教育政策としては、ICT環境を整えるためのGIGAスクール構想が前倒しで実施されつつあり、「1人1台端末」の配付が2020年度中に実現される予定になっています。学校現場ではその導入・活用のために、端末の調整や研修が進められています。

本センターには学部や大学を教育現場や他大学、他機関と結ぶ機能を期待されており、特にICT分野などにおいて他大学や教育委員会、現場の教職員の方々と連携・協力しながら、新たな教育のモデルを創造していくことは、本センターの重要な役割であると言えます。

その際、「何が正しいのか？」正解がわからない混沌とした状態では、「公正さ」が最も重要となります。このコロナ禍では教育格差が広がっていると言われていますが、苦境に立たされている経済的に恵まれない子どもたちへ、公正に教育の機会均等が実現するよう努めなければならないことを、私たちは肝に銘じておかなければなりません。

## 教育フォーラム2020

### 「特別の教科 道徳」について学び合う

センター客員教授 安井 俊夫

11月14日(土)に「教育フォーラム2020」を開催しました。例年は8月に実施していますが、今年はコロナウィルス感染拡大防止ということで、11月の、そして午後からの半日の開催となりました。感染対策を十分行い、対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド形式で行いました。今年は「『主体的・対話的な深い学び』と『特別の教科 道徳』」をテーマに、参加者全員で「考える道徳」「議論する道徳」について考え、理解を深めました。

はじめに、人間発達科学部の児島博紀先生が「『特別の教科 道徳』における『議論』のあり方や教材の使い方について考える～哲学の視点から～」という演題で「道徳教育は〈心の教育〉なのか」「道徳科で何を目指せばいいのか」「教材をどのように使えばいいのか」について話され、そのあと小グループにわかれ、児島先生からの提案について議論し、おわりに人間発達科学部の増田美奈先生にまとめていただきました。コロナ禍の中、県内各学校への案内はできませんでしたが、34名の先生、学生の参加を得、学びの多い研修会となりました。

参加者してくださった皆さんからいただいた感想の中からいくつか紹介します。「哲学の視点から道徳について考えることができ、とても興味深かった。日頃、実践の視点からのみ道徳科を捉えていたが、このように道徳教育論という学問の視点から捉える機会によって道徳科の見方が広がった。」「あらためて道徳という教科の根本的な意義、捉え方について考えさせられた。現場にいたらどうしてもミクロの方向に考えがいきがちであるが、マクロの視点への再確認、誘いだった。」



### 互いの話題提供による学び合い

センター客員教授 田中 親義

内地留学生として富山大学で学ばれる現職の先生方とゼミ形式で学び合っています。在籍する各学校の現状等を紹介し合う中でよく耳にするのは、「これまでは先輩の先生方に多くのことを教えてもらったと、つくづく感じさせられる」や「若い先生方が増えてきて、今後は自分たちがアドバイスしていかなければならない立場だと思う」というような内容です。これこそ、中堅教員としての立場を自覚しておられる発言であり、とても頼もしく感じられます。

そこで、昨年度からは、内留学生それぞれに自らの教職経験や自校の現状等を話題提供してもらい、仲間とともに議論し、解決策を探ったり今後の取り組み方を考えたりしながら、教育全般の課題として共有できるように努めています。

内地留学は、小・中・高・特別支援等畑違いの教員が集うという点で、ある意味「恵まれた環境」です。そのため、「〇〇学校ではそんなふうにとらえて対応するのか!」というような、新鮮な「気付き」もあり、話し合いがより活発になると同時にそれぞれの先生方の教育観が膨らんでいくのを感じられて、うれしく思うことも度々です。

互いの職場や各人が抱える教育的問題を、内地留学の場でも出し合い、共有し、解決策や対応の在り方を探ってそのエキスを持ち帰る事で、学びの成果が県内各地に還元されていきます。富山大学の内地留学制度がこのような形で富山県全体の教育進展に貢献できるとすれば、こんなにうれしいことはないと思っています。

## 富山大学人間発達科学部・附属学校園 共同研究プロジェクト 活動紹介

### ■「特別支援教育とICT活用」研究グループ

本部会は、附属特別支援学校の先生と学部の水内が中心となって活動しています。2018年度からは知的障害特別支援学校におけるプログラミング教育のあり方について主として研究してきました。2020年度より、小学校のみならず特別支援学校の小学部においてもプログラミング教育は取り組むべきこととされました。ここで考えなければならないことは、児童の実態もニーズも多様な特別支援教育の文脈の中で、このプログラミング教育の経験が、児童のどのような学びにつながるのかということです。教育活動が生活や他の学習に般化することが特に知的障害児の教育には重要になります。

また、特別支援学校における小学校段階のプログラミング教育で「コンピュータを用いない、アンブラグド・プログラミングの教育」だけでよいという意見も時折みられます。「ダンス」の動きを考えて、順次、分岐、繰り返しを意識させる実践は特別支援学校でもよく取り組まれています。たしかにプログラミング教育はプログラマーを育てることではないです。しかし、プログラミング的思考が長けた人は、物事を論理的に考えることができ、例えば誰かにものを頼む際にも、その指示は的確でわかりやすいものとなるでしょう。今日プレゼンテーション能力とスキルの習得は知的障害特別支援学校でも高等部情報の時間などで扱っていますが、わかりやすいプレゼンテーション作成の可否はプログラミング的思考に大きく左右されます。PowerPointなどのプレゼンテーションソフトを使いこなすためだけでなく、AI時代を生き抜くためにもタブレットやロボットなどのICTに触れないで良い、アンブラグドだけで良いということはないと考えます。むしろICTの活用はプログラミング的思考だけでなく、認知面、社会的スキル、コミュニケーションといったような様々な力につながる学習活動に展開できます。こうした今とこれからを生きる知的障害のある子どもたちに必要な力を、プログラミング教育という視点を取り入れつつどのように行うかということも重要な検討事項です。

水内（2021）は、障害のある子どもたちにプログラミング教育を実施する上で、やみくもに試行錯誤するだけの活動では論理的に考えることにはつながりにくく、以下に挙げる5つのポイントを、特に知的障害のある児童生徒におけるプログラミング教育において留意すべきこととしています。

- ・思考の可視化
- ・できた、わかったを支える支援ツール
- ・苦手を補い過度な失敗をしない配慮
- ・協同する学びの環境設定
- ・生活に資する、繋がる教育活動

上記に示したものはめずらしいことではなく、「プログラミング教育」である前に、当たり前のことですが、まずは「特別支援教育」なのです。したがって、個々の子どもの実態把握に基づき、教科・領域等における学習内容の目標の達成のための学習活動の一環としてプログラミングを取り入れた教育をどのように織り込んでいくのが、これから実施をしていく学校や先生には求められています。

附属特別支援学校における今年度までの3年間のプログラミング教育の取り組みの集大成として、研究授業とともに示す全国研究会を、2021年2月12日（金）にオンラインにて開催し、全国の300人以上の特別支援教育関係者の参加がありました。今後も先導的な教育実践と研究を進めていきます。（文責：水内豊和）

## 附属幼稚園から

附属幼稚園 鶴見 真理子

本園では、教育課程の再編を通して、子供たちが発見したり比べたりする「探究する活動」がもっと必要であるという課題を見いだしました。昨年度は「子供の探究心を育む一領域「環境」を中心に—～探究する子供の学びを捉える～」という研究主題で研究を進め、子供の探究心を育むには教師の手立てが必要であることが明らかとなりました。

そこで、今年度は、研究主題の副題を「探究する子供の学びを支える」とし、教師のより有効な援助の在り方について研究を行うことになりました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大防止のため長期休業の措置を取ったり、保育フォーラムを中止せざるを得なかったりしました。このような状況の中でも、日々の保育や園内研究保育を通して、探究する学びを支えるための援助について探ることができました。特に園内研究保育では、大学の先生方に実際の保育を見ていただきながら、専門的なご意見やご助言をいただくことができました。研究の成果としては、子供の探究心を確かに捉えるために、子供の学びの記録や教師の援助とその意図や考察を毎日記録していくことで、長期や短期の見通しをもった保育計画を立てたり、次の日の保育について考えたりして保育することができました。また、探究心の育ちを支える援助の在り方を考えるために、教材を工夫したり、どのような遊びが有効かを探ったりすることもできました。援助について考える際には、視点を設けて考えたことで援助の幅が広がり、振り返るときに有効でした。これらの成果は、令和3年度7月に開催する保育フォーラム（オンライン開催）にて、発表いたします。

そして、来年度は、今年度の成果を基に、「探究する子供の学びを支える」研究を引き続き行っていきます。今後も附属幼稚園の研究に、ご指導とご協力をよろしくお願いいたします。

## 附属小学校から

附属小学校 福田 慎一郎

本校では、平成29年度から研究主題を「深い学びの実現に向けた教育課程の創造」としました。今年度は、「子供が自ら次の活動に歩み出すための手立てを明らかにする」を副題に掲げ、子供が自ら問いを解決し、次の活動に歩み出すまでの場面に焦点を当てた研究に取り組みました。

研究を始めた当初は、子供が自ら次の活動に歩み出すためには、考えを再構築する場面以降の手立てが重要だと考えていました。しかし、実践研究を進める中で、子供が考えを再構築するまでの教師の手立てを確実に講じることで、子供は「次の活動をやってみたい」「問題を解決したい」という追究意欲をもつことが分かりました。その上で、子供が再構築した考えに自信をもてるようにする手立てを講じることで、子供は自ら次に歩み出すことが分かりました。これらの前提を踏まえ、実践研究の結果、次のような手立てが有効であることが分かってきました。

- ① 子供が再構築した考えに自信をもち、次の活動への見通しをもつために、解決のための視点を基にした自己評価の場の工夫や自分の変容を見つめ直す自己評価の場を工夫する。
- ② 子供が再構築した考えを実感を伴って理解し、再構築した考えが子供の思いや願いの実現につながることを、次の学習課題の解決につながることを、子供が自覚できるように、再構築した考えを生かして「次は〇〇したい」と見通しをもっている子供に思いや願いの背景（考え）を問い返し、その背景（考え）を学級全体で共有できるようにする

また、これまでの3年間の研究の成果として「子供がつくる『深い学び』」を東洋館出版から出版しました。9月からは、新研究主題「学び続ける子供が育つ授業の創造—対話に着目して—」を掲げました。研究初年度は「学び続ける子供の様相を探る」を副題に設定し、学び続ける子供の様相を探りました。

この成果は、令和3年6月11日に開催する教育研究発表会で報告いたします。そこでは、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官鳴川哲也先生の講演を予定しており、今後の研究にご示唆をいただき、次年度の研究に生かしたいと考えております。今後も附属小学校の研究にご指導とご協力をお願いいたします。

## 附属中学校から

---

附属中学校 龍瀧 治宏

今年度は、6月に教育研究協議会で「教科の本質に迫る授業づくり」をテーマとした研究の最終発表をする予定でしたが、コロナウイルス感染拡大の予防の観点から残念ながら中止となり、研究紀要でのまとめとなりました。教科の本質に迫ることは、教師が学習内容を構造化し「身に付けさせたい資質・能力」を明確にした上で、教科固有の「見方・考え方」を働かせる問いを吟味することで、思考・判断・表現を促す学習活動が展開されます。さらに、各教科で実現をめざす学びはその先どこにどう繋がるのかを見据えた有効な問いを工夫することで、生徒の学びはより深くなり、身に付けさせたい資質・能力を高めていけること明らかになってきました。こうした成果の一方で課題も残りました。そもそも教科固有の「見方・考え方」とは、どのようなものなのか、学びが深くなるとはどのような状態のことを言うのか、また、それらが育成すべき資質・能力の向上に対してどのように関連するのか、など授業づくりにおける手段・目的をさらに明確にする必要性です。

そこで、今夏からは、新副題「見方・考え方を働かせ深い学びを実現する授業づくり」の下、各教科の「見方・考え方」にはどのようなものがあるのか、「深い学び」とはどのような状態なのかについて、各教科の立場から捉え直すことから始め、それぞれまとめた見解を発表し合う研修を行いました。来年度6月3日の教育研究協議会には、各教科より、教科固有の「見方・考え方」や、それらを働かせて、「深い学び」を実現していくための授業づくりについての考えの一端をお示ししたいと考えています。

パンデミックにより時代が益々大きく変化しています。この大きな変化により生徒たちの行く手には私たちの想定を超える未知の状況が続いていくことでしょう。こうした時代に、主体的に考え、協働しながら課題を解決し、新しい価値を生み出していく資質・能力を身に付けるためには、これまで本校が追究し続けてきた「課題学習」がますます意義をもつだろうと思います。教育研究協議会や公開授業に参会いただく先生方からのご意見を拝受し、副題「見方・考え方を働かせ深い学びを実現する授業づくり」に研鑽していきます。よろしくお願いいたします。

## 附属特別支援学校から

---

附属特別支援学校 柳川 公三子

附属特別支援学校では、2016年から富附特支型研修「学びあいの場」（以下、「学びあいの場」）の開発に取り組んできました。「学びあいの場」は、教師の「子供の内面を見る力」を培うことを主眼とする本校独自の新しい授業研究モデルです。私達教師は、授業のねらいを念頭に置きながら授業を実践します。そのため、ねらいどおりに「できた」「できなかった」という結果に意識が向きがちになります。ところが、授業中の子供をよく観察すると、その過程において子供なりにいろいろ考え、試行錯誤している様子が見受けられます。そこにこそ子供なりの主体的な学びがあるのです。しかし、その学びは見えにくく、授業者が一人で捉えることは容易ではありません。そこで、同僚の力を借り、皆で授業の中の気になった子供の姿を基に、「なぜ子供はそのような言動をしたのか」と、多角的、多層的に解釈していきます。どの解釈が正しいかではなく、「どのような子供の姿から、そのように解釈したのか」について聴き合い、子供の思考や学びに近づこうと掘り下げていきます。

今年度は、「学びあいの場」の事前に「授業づくりの聴き合い」を行いました。「学びあいの場」当日に、授業のねらいに迫る子供の主体的な学びに関して聴き合いを掘り下げられるよう、授業づくりの段階から各学部で授業参観を行い、皆で子供の姿と解釈を基に子供の学びの実態について聴き合いを重ねました。本校の教師からは、「自分では気付かなかった子供の学びの様子が分かり、単元のねらいに関する実態を捉え直し、授業を改善することができた。」という内容の振り返りが多数聞かれました。今後も、「子供の学びの過程」を丁寧に捉え、子供たちが主体的に学ぶ姿の実現を目指していきたいと考えています。

今年度は、コロナ感染症拡大防止のため公開教育研修会が中止となりました。来年度は、令和3年7月3日（土）に公開教育研修会を行います。どうぞよろしくお願いいたします。

### 学習環境研究部門

---

センター准教授 長谷川 春生

本年度、学習環境研究部門では、内地留学派遣の2名の先生方から、研究協力員として本部門の研究や研修にご協力をいただきました。南砺市立井波小学校の笹谷和生先生は、小学校中学年を対象としたプログラミング教育について研究を進め、その成果は、北陸三県教育工学研究大会（富山大会）において「発表場面でプログラミングを取り入れた総合的な学習の時間の授業実践と評価」のテーマで発表をされました。魚津市立東部中学校の関口健先生は、GIGAスクール構想における1人1台端末の導入に関わり、Google for EducationやMicrosoft Teamsの活用方法について研修を進めていただきました。さらに、プログラミング教育の実践に関わる準備等も手伝っていただきました。

例年実施している研究会について、本年度は、富山県教育工学研究会とセンター本部門の主催で、教員セミナー「令和時代の学びと学校を考える 次代に求められる資質・能力をどう育てるか」を12月5日（日）にオンラインで開催しました。東北大学大学院教授の堀田龍也氏と富山県教育工学研究会会長の山西潤一氏による対談、富山県内の3名の先生方によるICT活用等に関わる実践発表、そして、富山県教育委員会主幹の松倉美華氏と上越教育大学教授の清水雅之氏によるワンポイントレクチャーにより、ICT等を活用したこれからの学びの在り方について研修を深めることができました。

GIGAスクール構想による1人1台端末の十分な活用やプログラミング教育の充実のため、来年度も本年度と同様の取組を進めていきます。

### 教育臨床研究部門

---

センター准教授 石津 憲一郎

センター講師 近藤 龍彰

教育臨床部門では、現在2名体制で部門運営を行っている。今年度も例年通り、富山県教育委員会との共同事業、また県内の各教育事務所から派遣される内地留学の先生の受け入れを行いました。前期・後期合わせて9名の先生方が研修を行いました。研修のテーマとしては「学校不適應の改善に向けた児童及び保護者との関わり方」や「学校心理学の視点から見たチーム支援の在り方～心理教育的アセスメントに焦点を置いて～」などがありましたが、いずれもこれまでの教育経験を振り返るとともに、現場に活用できる知見や視点を修得していったもらったものと思われます。なお、本事業は教員カウンセラー（富山県カウンセリング指導員）育成事業の一環として行われており、現場への臨床心理的知識の普及にも貢献しています。

また、教育臨床部門の研修会として、学校の教員とともに、教育心理学に関連する書籍を読み合わせてディスカッションをする「教育心理学勉強会」を開催しました。今年度は、6月6日（教育心理学的視点からとらえた学力）、9月26日（非認知能力）、2月27日（教育心理学的視点からの教育実践の提案）、の計3回の勉強会を行いました。

例年開催されている教育臨床部門の研修会は、新型コロナウイルスの感染拡大の懸念もあり、今年度は開催できませんでしたが、県内カウンセリング指導員向けの座談会を複数回開催しました。今後も地域の教育現場に対して有益な情報発信を続けていきたいと思っています。



## 教育工学研究部門

---

センター教授 小川 亮

令和2年度の活動として、(1)「教育フォーラム2020」の実施、(2)実践センター Web サーバの整備、に取り組んだ。

### 「教育フォーラム2020」の開催

安井客員教授と連携協力し、令和2年11月14日(土)13:30~16:00の日程で、学部3棟341教室を会場として「教育フォーラム2020」を開催した。新型コロナウイルスの感染拡大に対する対策を施した上で開催するため、参加者間の距離を十分にとった上で、マスクを着用しての実施となった。併せて、zoomによるオンライン参加も受け付けることとし、ハイブリッドな形でフォーラムを開催した。



学部の児島博紀先生に講師をお願いし、『特別教科 道徳』における『議論』のあり方や教材の使い方について考える ～哲学の視点から～という演題で講演をいただいた。1時間20分の講演を受けて、参加者がグループに別れてディスカッションを行い、その後で話し合ったことを各班の代表がまとめ、全体で共有してから全体で協議を行った。最後に学部の増田美奈先生に講話とまとめのいただき会を閉じた。参加者の感想からは、道徳が特別教科となったこと、教師による明確な授業展開と評価が求められるようになったこと、道徳教育に対する教育哲学からのアプローチへの興味、教師自身が分からないこと(葛藤)を子どもと共有することの大切さ、その葛藤を乗り越えるための「対話」の大切さといった言葉を聞くことができた。道徳教育について参加者と認識を深めることができたと言える。

### 実践センター内の Web サーバの整備

実践センター内の Web サーバ用に Mac mini を購入した。既存の3つにサーバを統合して置き換え、運用することとした。

## 環境教育部門

---

センター教授 高橋 満彦

技術専門職員 増山 照夫

当部門は、西田地方に所在する学部附属農場を管理し、実習等を提供したり、ゼミや研究室の活動を支援したりしております。本年度は、栽培技術実習30コマをコロナ禍の折ながら、なんとか実行しました。初夏までは遠隔授業であったため、教職員による野菜等の植え付けが済んだ後に、やっと実習が開始されたというわけです。田植えもゼミ活動として数人の学生だけで実施されました。

対面授業として遅れて開始した実習ですが、時間割の都合で土日や夏季休暇中に集中講義という形で実施されました。しかし、これはこれで愉快でした。というのも、コロナ禍の鬱屈から日常の喜びを取り返すかのような学生たちの明るい声が田畑に響いたのです。例年ならば夏季休暇中であまり学生にいない中で行う稲刈りも、今年は賑やかでした。

収穫物は、学部や附属学校園の調理実習等で利用し、残りは販売処分されますが、今年はコロナ対策で調理実習等も少なく、やや張り合いがない状況でしたが、生産物の一部は学生への支援として配給されました。

さて、この農場ですが、今年突然困った話が降ってきました。学長以下執行部が、農場を廃止して開発業者に委ね、換金しようというのです。また、長年農場の管理業務に従事してきた増山職員の再雇用任期が切れて退職となりますが、後任補充がないということも通知されました。

当農場は、学生の実習、材料の提供、そして産学連携や研究に幅広い活動を行い、何よりも学生に得難い農事経験を積ませてきました。しかし、それらの実績が尋ねられることもなく、停廃に至るのは大変残念であります。

とはいえ、嘆いても、心なき者に期待しても仕方ありません。次年度以降は寺町に所在する自然観察実習センターの圃場を利用して、従前からの活動を継続する所存です。

最後に増山さんの永年の功労に感謝して報告とします。

## 内地留学を経験して

富山県立富山西高等学校 教諭 中嶋 友美

新型コロナウイルス感染症の流行により、自宅待機からのスタートでしたが、この間に心理学関係の本を読みあさったことが、内地留学中の研修の方向性を示してくれました。自分の経験や今まで出会ってきた生徒との関わり方が心理学、認知行動療法という観点から整理されました。授業がオンラインで開始され、今までの経験を十分な時間をとって振り返ったことで、これからの自分に何ができるかをじっくりと考えることができました。新学習指導要領では保健分野で新たに精神疾患について扱うことになっています。より具体的に心の不調について知り、心の健康を保つための能力を育むことが求められます。保健体育科の教員として、保健の授業で予防的心理教育プログラムを展開することの可能性を探り、子どもたちが自身の直面する課題を解決していく一助になるよう、今後も実践を続けていきたいと思います。また、一教員として心理教育的援助サービスという視点から生徒との関わり方について考え続けていきたいです。半年間の内地留学での経験を微力ながら学校教育に還元していきます。

南砺市立井波中学校 教諭 塚田 香織

教員生活も14年目となり、生徒との関わりにもある程度自信をもってきました。「この生徒には、こんな接し方がよい」「こういう場合、原因はこうだろう」と経験を基に判断し対応していく一方で、どこか生徒の心が見えていないような不安も覚えていました。そんな行き詰まりを感じていた私にとって、内地留学は多くの学びを与えてくれるものでした。授業や実習を通して、最も考え方が変わったのは、「見る」と「聞く」ことに対してです。表面に見えている「問題」ではなく、その奥にある「感情やニーズ」を見ようとする、ということに、はっとさせられました。また、生徒を分かってほしいと「聞く」ことが、いかにできていなかったかということも痛感しました。新たな学びを得るたび、出会ってきた生徒や具体的な場面が思い浮かびました。教員としての経験を積んだ今だからこそ、内地留学での学びを貴重なものとして捉えられたのではないかと思います。このような機会をいただけたことに感謝し、目の前の生徒のためにそれをどう生かしていくかを常に考え、実践に繋げていきたいと思っています。

入善町立入善中学校 教諭 木村 有希

私には、これまでの生徒指導の中で、「この支援でいいのかな」とか、「どうしてみんなに対応しているのにうまくいかないんだろう」という疑問がありました。今回の研修を進める中で、生徒指導上の問題解決の場面では、教師の困りの解消が目に向くあまり、子どもの困りという問題の本質を捉えた対応がなされていないことが多いのではないかと考えるようになりました。そして、その解決策として、問題解決へ向けて手立てを考えるだけでなく、まず問題の見立てをすること、すなわち生徒理解を深めることの大切さに気付かされました。行動だけに目を向けず、「変えようとするな、分かってせよ」という姿勢で、子どもの感情や思いに目を向けることや、日々の会話や面接の中でその子の強みや支えを知り、その子の世界に入れてもらうこと、また、それらをチームで行い、みんなでその子を支援することが大切なのだ学びました。この半年間での学びや出会いを大切に、これからも生徒と向き合っていきたいと思っています。

## 令和2年度教大協北陸地区教育実践研究指導部門研究協議会報告

---

長谷川 春生

令和2年11月12日、上越教育大学の運営によりオンラインで標記の協議会が開催されました。富山大学からは小川先生と長谷川が参加しました。コロナウイルス感染拡大防止の状況における教育実習の現状と課題（今後の対応）等について協議が行われ、教育実習を行うことができなかった大学での代替措置などの事例が報告されました。さらに、Zoom等を用いた遠隔授業における工夫（実践事例）、教育実践研究を含む各センターの今年度の業務と今後について（上越教育大学）等についても情報交換が行われました。

## 第97回国立大学実践研究関連センター協議会報告

---

笹田 茂樹

2020年9月11日（金）10:30からzoom配信によって、第97回国立大学教育実践研究関連センター協議会が開催された。富山大学から笹田センター長と小川が参加した。また前週の2020年9月4日（金）15:00から、同じくzoomにて、同協議会の役員会が開かれ、富山大学から小川が参加した。総会当日は、岐阜大学の加藤会長から挨拶があり、コロナ禍の中で起こっている問題状況に協議会として対応するために、今後もzoom等を利用してセンター間の交流を活発に行う方針であることが表明された。その後、2020年度の体制と予算案が了承され、2019年度の会計報告が承認された。後半は、三重大学の須曾野先生、山口大学の木谷先生、東京学芸大学の小林先生から実践報告が行われたあと、各センターからの報告が行われた。

## 第98回国立大学実践研究関連センター協議会報告

---

小川 亮

2020年3月2日（火）15:00から役員会、翌日の3月3日13:00から第98回国立大学教育実践研究関連センター協議会が開催された。富山大学から笹田センター長と小川が参加した。昨年、急逝された岐阜大学の加藤直樹会長の後を引き継いだ、東京学芸大学の小林正幸会長代行を中心に、今後の体制についての議論が中心となった。議論の結果、小林会長代行が1年だけ会長に就任すること。副会長に三重大学の須曾野先生を据えること。次回の協議会までに、情報交換のための会議を開くこと。コロナ禍の影響で執行されていない予算があるので、それを利用して部門別、地域別などの活動を活性化していくこと。次回の協議会は、10月16日17日に北九州国際会議場で開催される日本教育工学会の大会にあわせて、10月15日に開かれることなどが決定された。

# 業 務 報 告

---

## センター日誌 令和2年度の実践総合センターの主な行事

- 令和2年(2020) 6月24日 センター運営委員会・センター紀要編集委員会センター会議  
9月2日 センター紀要編集委員会  
9月11日 第97回国立大学教育実践研究関連センター会議(東京学芸大学(Zoom))  
9月30日 センター紀要編集委員会  
11月12日 日本教育大学協会北陸地区会教育実践研究指導部門研究協議会  
(上越教育大学(Zoom))  
11月14日 教育フォーラム2020  
『『主体的・対話的な深い学び』と『特別の教科 道徳』』  
12月5日 教員セミナー  
「令和時代の学びと学校を考える 次代に求められる資質・能力をどう育てるか」
- 令和3年(2021) 2月3日 センター会議  
2月22日 センター紀要編集委員会  
3月4日 第98回国立大学教育実践研究関連センター協議会(東京学芸大(Zoom))
- 

## 編 集 後 記

今年度も、多くの方々のご協力により、センターニュースの41号をお届けできることとなりました。

今年度を大きく特徴づけるものは何をもってしても新型コロナウイルスの感染拡大とそれに伴う様々な社会的影響かと思われまます。特に、あらゆる教育機関が、これまで当たり前だと思われていた対面授業がなくなるという事態に直面することとなりました。そのことは逆に、学びとは何かを本質的に考える機会となりました。この状況の後、教育がどのような方向へと進んでいくのか、実践センターとしてもしっかりと検討し、情報発信していく必要があると言えます。

|      |   |
|------|---|
| 印 刷  | 令和3年3月19日   |
| 発 行  | 令和3年3月22日   |
| 編集発行 | 富山大学人間発達科学部<br>附属人間発達科学研究実践総合センター<br>代表者 笹田 茂樹<br>〒930-8555 富山市五福3190 ☎076-445-6380 |